



勇者様にいきなり
求婚されたのですが 1

富樫聖夜

Seiya Togashi

RB

レジーナ文庫

勇者の仲間達
+
姫

ファラ

レベル : 80
保有スキル: 「防御力強化」、
「回復術」ほか。

女戦士。非常に漢らしい性格。

レナス

レベル : 90
保有スキル: 「精霊の恩恵」、
「防御力強化」ほか。

神官。グリードのストッパー役。

ミリー

レベル : 79
保有スキル: 「解除」、 「隠密」ほか。

女盗賊。グリードとレナスの幼馴染。

ルイーゼ

レベル : 2
保有スキル: 不明。

シュワルゼ国第二王女。
リュファスの恋人。

リュファス

レベル : 89
保有スキル: 「解析」、 「回復術」
ほか。

実はエリューシオン公国第二皇
子である魔法使い。姫の恋人。

ルファーガ

レベル : 測定不能
保有スキル: 不明。

エルフ。勇者一行の導き
手であり、監視役。

アーリア

レベル : 1
保有スキル: 「ツッコミEX」。
(隠しスキル)

ルイーゼ姫付きの侍女。王道や
定番、普通をこよなく愛する。

グリード

レベル : 測定不能
保有スキル: 「精霊の加護」、
「魅了術」その他
いっぱい。

歴代「最強」の勇者で、同時に
「最凶」の勇者でもある。

登場人物
紹介

目次

勇者様にいきなり求婚されたのですが	1
空っぽの心	263
終わりの始まり	291
そして物語は始まる	315
書き下ろし番外編 囚われの姫君	327

勇者様にいきなり求婚されたのですが 1

プロローグ

大国シユワルゼの美しいと評判の姫君が魔王に攫さらわれた。

王はすぐさま兵隊を派遣して姫を救い出そうとしたが、魔族の圧倒的な力によって蹴け散ちらされて失敗。

進退きわまつた国王は、神託を受けた勇者に力を貸してもらうことにした。

城に集まつた勇者一行に国王は言った。

「どうか、どうか、姫を救い出して欲しい。もちろん、褒美はそなたらの好きなものを与える約束しよう」

「わかりました。命に代えても姫を救い出しましょう」

頷うなずいた若者——勇者は、金髪に青緑の瞳をした驚くほどの美貌びぼうの持ち主だった。

彼だけではない。彼の仲間の魔法使い、エルフ、女戦士、神官、女盗賊の五人全員がハツと人目を引く容貌ようぼうをしていた。

え？ 顔？ 顔で選ばれた？

この場に居合わせた宰相、大臣達、そして姫の侍女Aは思わず頭の中でツッコんでいたが彼らは顔がいいだけではなかった。顔も良ければ実力もあるパーティだったらしい。

勇者一行は人々の（主に女性の）歓声を受けつつ出発し、姫君を救い出して凱旋がいせんしたのだ。

しかも、魔王まで倒して。

「おお！ よくぞ無事に姫を取り返してくれた！」

娘と感動の再会を果たした王は上機嫌で言った。

「嘘偽りは申さん。そなたらの望む褒美を与えよう！」

この時、広間に集つた人々は期待していた。

三国一といわれるほど美人な姫君と、彼女を魔王の手から救い出した勇者。並んでいる姿はまるで絵画のように麗しく、誰もががお似合いだと感じたからだ。

きつと、お決まりの物語のように二人の間には恋が芽生えたに違いない。芽生えないわけがない。だから、勇者は褒美として姫を求めてくるだろう。

そして二人は結婚していつまでも幸せに暮らしました、となるに違いない。

王の言葉を聞いた勇者は、光の具合で青にも緑にも見える瞳をきらめかせ、真剣な眼差しを玉座に向けて言った。

「では、この国から花を一輪、私が持ち帰ることをお許しください」

キター！と、誰もが思った。

もちろん、ここで言う「花」は姫君のことだ。

「うむ。許す。許すぞ」

王は何度も頷いた。

「もちろんですとも」

王妃も顔をほころばせる。

「ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべた勇者は優雅に一礼し、愛する女性の下へ向かった。

そして彼女の前で歩みを止めると、青緑の目に愛しさとやさしさを込めて言った。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」

——と。

——姫の侍女Aの手を取りながら。

1 勇者様の求婚

初めまして、こんにちは。

アーリアと申します。

侍女Aです。

子爵家の娘で、行儀見習いを兼ねてこのシユワルゼ国の第二王女ルイーゼ様の侍女を務めております。

つい先ごろ魔王に攫さらわれた姫様が、勇者の手によって救い出されて無事に城に帰還しました。

大変喜ばしいことです。姫様の無事を願って毎日毎日神に祈りを捧げてきた甲斐がありました。

——ですが。

どうなっているんでしょうか、この状況は。

目の前にはキラキラと後光が差すくらいに麗うるわしい容貌ようぼうの男性。

その彼——勇者、グリード様がどういうわけか私の手を取って言ったのです。

「貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」と。

周囲はビックリです。王様など、仰天のあまり玉座から立ち上がっているくらい。だけど、一番ビックリしたのは私です。

貴方は姫様にプロポーズするんじゃないやなかつたんですか!?

それなのになぜ私の前に立って、手なんか握にぎっているのでしょうか……

——姫様。

そこで私はハッとしました。

そうです。この場面を見て姫様はどれほどショックを受けていることでしょうか。勇者様が自分をスルーして、自分の侍女にどういうわけか求婚しているのですから。

私は手を取られたまま、グリード様の肩越しに姫様の方を窺うかがいました。

するとどうでしょう。姫様はこちらなんて見てません。ひたすら、長い黒髪に茶色の

瞳を持つこれまた美形な男性、勇者様一行の魔法使いとじつと見つめ合っているではありませんか！

うっすらと頬を染めたその顔は、恋してる乙女そのものです。

ちよ、なぜ王道の勇者様ではなく魔法使いと恋に落ちてるんですかあ!?

わけがわからなくなつて、思わず周囲に視線を走らせた私は気付きました。広間にいる者達はこの事態に驚いているのに、勇者様一行の方々は誰も驚いていないことに。

それどころか、皆様こつちを見ていらして、

「頑張れよ、グリード」

「そうそう。ガンガンいつちやえ！」

「結婚式はぜひと僕に執らせてね」

とか何とか煽っています。ちなみに発言は女戦士、女盗賊、神官の順です。

私は彼らのこの言葉を聞いて、勇者様が私を好きだというのは、パーティの間では既知の事実であることを悟りました。

どうやら突発的に、おかしくなつての行動ではないらしいです。

……困りました。

魔王の呪いか何かで、私なんぞに求婚しているという状況の方が何倍もマシです。

正気に戻れば、このプロポーズはなかったことにできるのですからね！

ですが、彼らの様子ではそれはなさそうです。勇者様は正気で、それも本気らしいです。

私は恐る恐るグリード様を見上げました。

「あ、あの正気ですか？」

わずかな希望を求めて聞かずにはいられませんでした。

「もちろんです。貴女を愛しいと思うこの気持ちに嘘偽りはありません」

……即答されましたが。

嘘偽りであつて欲しかったです、勇者様。

けれど、どうやら勇者様の「花」は自分らしいです。

さつきはキラキラの後光に邪魔されて気付きませんでした、長い睫毛の下からのぞく青緑色の目は、蕩けそうな熱視線を私に送っています。

本気で困りました。

なぜなら私は、その他大勢の中の一人。

「モブキャラ」なのだから――

2 侍女Aの困惑

モブ。それは幾多の物語に必ず登場する雑魚キャラ。その他大勢。脇役ですらない、名もない存在。

巷に溢れる勇者物語の類の小説などでは通常、主役や準主役以外は名前は出てきません。その他大勢の雑魚キャラは、すべて職業で表されているのです。

大臣ABC、騎士ABC、兵士ABC、侍従ABC、などなど。

下手をすると「大勢の兵士達」とか「使用人達」、はたまた「広間に集った民衆」と、括られてしまう場合もあります。

もちろん、勇者物語には出てこなくても、実際には名前が存在しますけどね。雑魚キャラでも生きて生活していますから、名前がなくては困ります。

私もそんなモブキャラの一人に相当する人間でした。

この当代勇者物語において私に与えられた役割は、さしずめ「姫様の侍女A」といった役どころでしょう。

姫様が魔王に攫われる場面を目撃して、

『姫さまあああ！』

と絶叫し、王様や大臣達に、

『姫様が、姫様が魔王にー！！』

とパニックになりながら報告するのが役目。

実は何代か前の勇者物語でも、とある美姫が魔王に攫われたことがありまして、その際にも同じようなことをやりました――先代の侍女Aさんが。

そして私もそれに倣いました。いや、なりましたというべきでしょう。

ちなみに、魔王は人型ではありませんでしたが、美形ではありませんでした。はっきり言ってがっかりです。

美形なのが定番つてもんでしょう？　なんで中年の冴えないオッサンなの!?

と姫様を抱きかかえている自称「魔王」を見て、私が思ってしまったのは誰にもナイシヨです。

ついでに言うなら、普通魔王なら配下の者に命じて攫さらわせるだろうに、なぜ自ら単独で攫さらいに来たんだろうかと内心ツツコミを入れてしまったのもナイシヨです。

まあ、それは置いておいて、私の勇者物語についての役割はそれでほぼ終了してしまいました。

あとはひたすら姫様の無事を神に祈りつつ、主人のいない部屋をいつ帰ってきてほしいように整えるだけの毎日。

モブですから、やれることは限られてるんです。でもそんなモブ生活に満足していません。

だって、主役や脇役である勇者様一行は、私が心を痛めつつもどこかのほほんと過ごしている間、姫様を救うべく魔王と戦う日々だったに違いありません。

考えただけでもゾツとします。私には戦うスキルなんてありません。いえ、くれると言われてもいりません。私はモブで十分なんです。

ええ、誰がなんと言っても、侍女Aでいいんです！

だから、勇者様に求婚されるのは非常に、非常に困るのです。

だって、平凡そのもので、勇者様の妻になるスキルもステータスも持ち合わせていないのですから！

私はグリード様に取り残されたまま、ダラダラと冷汗が出るのを感じました。

周囲の視線も、驚愕きょうがくから「あの女は誰だ？」という何やら険のある視線に変わってきたような気がします。

それはそうでしょう。美しい姫様に求愛するのかとばかり思っていた勇者様が選んだのが、冴さえない侍女だったのですから。

「あ、あ、あ、あの、どうして私なのでしょうか……?」

ルイーゼ姫様は誰もが振り返るような美女。その美女と国に凱旋がいたんするまでしばらく一緒に旅をしていたのですから、好きになるのが当然の流れというもの。

なのに、この目の前の勇者様ときたら姫様には目もくれず、容姿も器量も普通の侍女に求婚しているのです。

誰もが思ったことでしょう。

なぜお前なのだ。

勇者様は淡い笑みを浮かべ、私を見下ろして言いました。

「この城に招かれた折、ルイーゼ姫を心配する貴女を見て一目で惹かれました。正直、魔王に関する情報が少なく、あの段階では直接魔王とやり合うのは時期尚早だと思っ
ていたんです。ですが、貴女の姫を救って欲しいという言葉に私は決心しました。貴女
のために姫を救い出そうと」

姫を救って欲しいという言葉……

ええ。確かに言いました。言いましたとも！

城に到着してすぐの勇者様に、『お願いです！ 姫様を、姫様をお救い下さい！』って、
絶ったのでしたっけ。

勇者様は勇者様らしく、絶る私を抱きとめて微笑みながら「大丈夫です」「貴女の姫
君は必ず助けます」と言ってくださいました。これが世界を救う勇者様の役割なので
から、特別なことではありません。

私が勇者様と直接言葉を交わした（と言えるのかどうかはともかく）のは、あれだけ
です。

勇者様が王様に謁見しにいらした時の広間には私もいましたけど、あの時の私に個人
的な発言権はなかったのですから。



ということ、あの絶つた時に見初められたということでしょうか？
でも、あれは侍女Aとしての役割のうちだったと思うのですが……
だってあれってお約束の台詞ですよ？

それなのにまさかあんなテンプレ発言で勇者様がやる気を出して、姫様を救いに行ってくれるとは。まして、恋愛フラグが一方的に立つとは。

——世の中何があるかわかったもんじゃありません。

「旅をしている間、ずっと思っていました。姫を救い出すことができたなら、貴女を……」
グリード様がひと際甘く私を見つめてきます。

私の背後にいる侍女仲間、つまりモブ仲間がザワついて「勇者様、素敵」とか何とか言っているのが耳に入りました。

私の近くにいる彼女らは、この勇者様の魅力である美形キラキラ光線のとりこになっっているのでしょうか。

でもツッコミ入れていいですか？

……ろくに話したこともないのに、いきなり求婚だなんて早くないですか？
ものすごく色々すっ飛ばしてないですか？

「ひ、姫は、姫はどうなるのだ？」

たまたま王様が玉座からよろよろと前に出て叫びました。どうやら我に返ったようです。

そして、勇者様に姫様を嫁がせる気満々だった王様はひどく憤慨されている様子です。きつと勇者様が姫様の気持ちを弄んだように思ったのでしょうか。

でも、肝心の姫様の様子は見えていないようです。いまだに黒髪の魔法使いと頬を染めながら見つめ合っているというのに。

そして当の勇者様は王様の言葉を完全に無視しました。

私を熱心に見つめるだけで、聞こえているだろうに王様の方をちらりとも見ません。

「ルイーゼ姫？ ルイーゼ姫には、リュファスがいるでしょう？」

代わりに答えたのが、エルフの青年、いえ、あの背格好は少年でしょうか、彼でした。彼は持つていた杖でホラとばかりに見つめ合う魔法使いとルイーゼ姫様を指しました。魔法使いはリュファスという名前だそうです。

そこでようやく王様は姫様の様子に気付いたようです。

「ひ、姫、これは一体……？」

王様の言葉に、姫様達は一瞬だけ王様を見ました。けれど、すぐに視線をお互いに戻してしまいました。不安そうな表情になる姫様に、魔法使いが安心させるようにやさしく微笑んでいます。

美形の微笑みは威力抜群です。

侍女仲間が私の背後で「キヤー」と黄色い声を上げています。

貴女方は美形ならなんでもいいんですか……？

いえ、勇者様に手を取られて求婚されているという状況でなかったら、私もあの黄色い声をあげる集団に交じっていたかもしれません。なのでツッコミ無用です。

魔法使いはもう一度姫様に微笑むと、その手を取って玉座に向き直りました。

勇者様に負けず劣らずの美形な魔法使いです。姫様と並ぶと、それはそれは絵になります。

周りの人達もそう思ったらしく、「ほう」と感嘆のため息がさざ波のように広がりました。

そんな中、魔法使いが言った言葉に、広間は騒然とすることになります。

「私はエリユーシオン公国の皇子、リュファス・リクリード・エリユーシオンです。シュワルゼ国王陛下、ならびに王妃陛下にお願い申し上げます。どうか、私とルイーゼ姫の結婚をお許しください」

私の手を取ったままの勇者様の背後で、ベタな展開が繰り広げられたのでした――

3 関係のないところで王道展開

魔法使いリュファス様の言葉が広間に朗々と響き渡りました。

その後、彼の言っていることの意味を理解した人々がざわめき始めました。

なんとリュファス様はエリユーシオン公国の皇子だということです！

それが本当なら、なんておもしろい……ではなくて、素晴らしい話なのでしょう。

私は主の僥倖がうれしくなってルイーゼ姫様に目をやりました。が、そこでビックリです。いえ、ビックリなのは私だけではありません。当の姫様までもが目を見開き、リュファス様に驚愕の視線を注いでいるではありませんか。

ちよ、もしかして姫様も今の今まで知らなかったのですか？

だけどそれなら先ほどの不安そうな姫様の表情も頷けます。

きっと姫様はリュファス様をただの魔法使いだと思っていたので、王様たちが自分たちの結婚をよく思わないのではないかと不安だったに違いありません。

神託を受けた勇者様ならともかく、一介の魔法使いに嫁ぐのを王様は良しとしなかったでしょうから。

「エリユーシオン公国の皇子、だと？」

王様は信じられない、といった表情でリュファス様と、彼に手を引かれている姫様を見ました。

エリユーシオンは同じ大陸にあり、わがシユワルゼより大きな、とても力のある大国です。少し遠い場所にあるため、国交はそれほどありません。

そういえば、私の目の前にいるグリード様も、その出身だという話をどこかで聞いたことがあるような気がします。

「エリユーシオン公国の皇子がなぜ、勇者の一行に魔法使いとして参加しているのだ？」

王様が誰もが疑問に思っていることを尋ねます。

「そういえば、聞いたことがあります。かの国の第二皇子であるリュファス皇子は魔術に長けた人物である」と

そう発言したのは、外務大臣でした。長年外交官をしていて、外国の事情に通じている人物です。

その彼が言うのなら、目の前にいる魔法使いがリュファス皇子であってもおかしくないのかもしれない。

「説明しましょう」

そう言ったのは、当のリュファス様でした。

「私とグリードは幼友達なのです。ですから魔族が台頭してきて、グリードが勇者として女神の神託を受けたと聞いた時、私にも何か彼を手伝えることがないかと思ったのです。幸い私には魔力があったので、魔法使いとして彼の一行に加わることができました」

リュファス様はそこまで言うと、向き直って愛しそうに姫様を見下ろしました。「皇子であることを黙っていてすみませんでした、姫。ですが、勇者パーティーの一員である私は皇子ではなく、あくまで魔法使いリュファスという立場のつもりでした。」

それに……これは私のわがままですが貴女に大国の皇子ではなく、リュファスとして愛して欲しかったのです。皇子としての自分ではなく、ただの男としての私を……」

「リュファス様……」

姫様の大きな目にたちまち涙が浮かび、真珠のようなその雫がぼろりと零れました。ですが、私にはわかりません。あれは悲しんでいるわけではないのです。

その証拠に、姫様はその顔に笑みを浮かべようとしているではありませんか。

「わたくしが好きなのはリュファス様その人ですわ。皇子でも魔法使いでもどっちでもかまいません。そんなのは些細なことです。ここにいるただの男の貴方を、わたくしは愛しているのですから」

「姫……！」

リュファス様は感極まったようにつぶやくと、姫様をぎゅうと抱きしめました。

そのリュファス様の背中に、おずおずと姫様の手がまわり、リュファス様のローブをきゅつと握り締める様が実に初々しいです。

私はその光景をグリード様に依然として手を取られたまま、グリード様の肩越しに目撃しておりました。

すごいです。主役であるハズの勇者様の背後で、その主役の座を脅かすようなベタで

王道な恋物語が展開されているのですから。

そう。要約するとこんな感じ——

『とある国に大いなる魔力を持った皇子がいました。

ある日、皇子の大切な幼友達が勇者の宣託を受けたということ聞きます。

彼は幼友達のために皇子としての自分を捨てて、魔法使いとして勇者の一行に加わりました。

そして、出会ったのが魔王に攫われていた美貌の姫君。

勇者一行は姫君を救うために魔王と死闘を繰り広げ、ようやくのことで姫を救い出すのです。

その過酷な旅の中で、魔法使いと姫君は恋に落ちました。

皇子という身分を明かさずとも、惹かれあう二人。

やがて一行は姫の国に凱旋して、魔法使いは姫の父親である王様に姫を請います。その時になってようやく魔法使いは身分を明かすのです。自分は皇子だと——』

おおお、なんたる王道展開なのでしょう！

一気に場の主役が代わりました！ というか、もうこのどさくさのうちにグリード様が私に言ったことは忘れてもらえないでしょうか！

だって、侍女Aに求婚する勇者様より、ずっとずっと見栄えがするんじゃないですか？

そんな事を考えていたら、不意に私の手をつかむグリード様の手に力が入りました。

「痛っ」

と顔を響めた私に、グリード様が言いました。

「見てはダメです」

「は？」

失礼なことを考えていたのがバレたのかと思わずグリード様を見上げた私の目に飛び込んできたのは、真剣な眼差しで私を見下ろすグリード様の表情でした。

相変わらぬの美形です。

ですが、その視線はさつきまでの甘いものとは違っていて、何やら炎が燃え上がっているように感じられて仕方ありません。

きゅっ。

また手に力が入ります。

今度は痛くはありませんでしたが、妙に力の込もったその手に威圧感を感じずにはいられませんでした。

「私を見てください。その瞳に、別の男を映してはいけません」

「——は？」

一瞬、何を言われたかわかりませんでした。

けれど、余所見をしていたのが気に入らないのだということをはかるうじてわかりました。

……リユファス様に見惚れていたわけではないですよ!?

「ル、ルイーゼ姫様とセットでもですか……?」

恐る恐る言った私に、グリード様はふるふると首を横に振りしました。

「セットでもダメです。他の男は見ないで下さい」

他の男って……。貴方の仲間で幼友達じゃないんですか……??

——どうやら勇者様は思いのほか嫉妬深いらしいです。

4 空気は読めますが、返事は玉虫色です

グリード様の嫉妬だかなんだかよく分からない妙な威圧のおかげで、私はリュファス皇子やルイーゼ姫様を見てはいけなような気になってきました。もちろん、それに対する王様たちの反応も。

ですが、勇者物語の主役が私の手を握ってまったく違う方を見ている間にも、話は進んでいきます。

「真のリュファス皇子なら、反対する理由はない。いや、もし王族でないとしても、娘が嫁ぎたいと望んだ者のもとに送り出してやるのが親というものだ」

王様の言葉が広間に響き渡りました。その言葉に呼応するように、王妃様の優しい言葉が続きます。

「そうですね、姫。貴女を救い出してくださいくださった方々ですもの。たとえ、皇子ではなくただの魔法使いであったとしても、わたくしは貴女の恋を応援しますよ。リュファス様、

娘をどうかよろしくお願い致します」

「お母様、お父様……」

「国王陛下、王妃陛下。ありがとうございます」

この様子だと姫様とリュファス様の結婚は許されるようです。

さすがに賢王、賢妃と呼ばれる国王夫妻。懐が深いです。

……まあ、本当に一介の魔法使いだったなら、こうして諸手をあげて賛成したかどうかはちょっと怪しい気もしますが。そこはそれ、つまらないケチはつけずに、素直に喜びたいと思います。

広間のあちこちから「姫様おめでとうございます」「お幸せに」という言葉が二人に掛けられました。

歓声や拍手まであがっています。すっかり広間中、リュファス皇子とルイーゼ姫様の結婚大歓迎ムードです。

ほんの少し前の戸惑いや驚愕の雰囲気は一体なんだったのかという感じで、今はこの王道恋愛ストーリーがまさに成るべくして成ったような、皆それを待ち望んでいたかのような晴れやかで和やかな空気が流れております。

みんな切り替えが早いです。さすが城勤めをしているだけありますね！

かく言う私もグリード様に手を取られていなければ、率先して拍手をしていたと思います。

だって、私は侍女歴六年ですから。空気を読むのは得意なのです。

だけど……私の目の前にいらっしやる方は、空気は読まないみたいです。いえ、あえてのスルーですか？

食う気嫁！

あ、間違えました。

空気読め！

だけど、魔力ゼロの私の念は勇者様には届かなかったようです……

自分の背後で幼馴染でもある仲間、しかも自国の皇子が伴侶を得ようとしているのに、ちらりとも視線を向けません、グリード様。ずっと私の顔をガン見です。穴が開きそうです。

平凡なモブの顔を見ても何の面白みもないと思うのですが……毛穴の数でも数えているのでしょうか？

——と、いささか私が現実逃避しているのは、はっきり言って怖いからです。

私が視線を姫様（とリュファス様）に向けなくなってから、グリード様の私を見つめる視線に甘さが戻ってきたのですが、さっきの妙に昏い炎を宿した瞳を見つけた身としては、それすらも「恐えええ！」という感じです。

蛇に睨まれたカエルのような心境です。

なのに、ああ、なんとということでしょう。空気を読めてしまう自分のスキルが初めて煩わしく思えてきました。

姫様とリュファス様の王道展開を堪能した人々の関心が、ふたたび私と勇者様に集まってきたのが分かってしまうのです！

「そういえばこの二人はどうなった？」みたいな感じで！

勇者様以外見てなくても、そんなものは空気で感じ取れます。

王道展開を見てめでたい雰囲気に触れちゃった人々の頭の中で、こっちもしかるべき結果であるべきだ、みたいな期待する空気が！

きつと皆様の頭の中では「姫を心配する心優しい侍女と、その彼女のために魔王を倒して姫を救い出した勇者の恋物語」みたいな話ができちゃっているのでしょうか。

なんてお花畑な……いえいえ、前向きな解釈でしょう。

その「心優しい侍女」が自分でなければ、きつと今頃私の頭の中にもお花が咲いてい

たかもしれませんね。

なんて変わり身の早い……と心の中でツツコミを入つつも、周囲の空気に迎合していたことでしょうか。

でもこんな空気は読みたくありませんでした！

あああ、私はまだ返事をしてないことに気付いて「よもや断るわけないよね？ 勇者様の求婚を」「まさかね」「勇者様を公衆の面前で振るわけないさ」みたいな視線がチクチクと！

そして、そんな空気を王様までもが読んだのか、

「そういえば、勇者殿の方はどうなったのだ？」

なんてことを玉座で言ってくれちゃったではありませんか！

広間にいる人達のほぼ全員の視線が、私と勇者様に向くのが分かりました。

ピンチです。

私は勇者様に手を取られたまま、顔と背中に冷汗がダラダラと流れていくのを感じました。

間違いなく生まれてこのかた一番の危機です。窮地です。

私の本音としては、この求婚を綺麗さっぱりお断りしたいです。

だって勇者様ですよ？ 女神から宣託を受けて魔王を倒す使命を負った、そしてそれを見事成し遂げた英雄ですよ？

ただの子爵令嬢で、容姿も能力も平凡そのもの。広間で集っている侍女に交じればすぐ埋もれる、記憶の端にも残らないその他大勢の私と……結婚？

あああ、無理！ どう考えても無理です！

他の誰が許しても私は許しません。勇者様の隣に自分みたいな女が並ぶことを！

これは絶対絶対お断りしなければなりません。ぶっちゃけると、不相応な事態は面倒に決まっていますからね。

でも、これ、断れるのでしょうか……？

私は必死で考えました。

断ったらどうなるのでしょうか。

もし嫌だなんて言ったら——私は国中の総スカンを食らうでしょう。これは間違いないです。

だって、私が勇者様の妻に納まれば、この国は勇者様と確かなつながりができますから。女神の祝福を受け、魔族を倒す力を持った勇者様とのつながりは、他国に対して政治的にも有利に働くでしょう。

だからこそ、王様や大臣の方々は当初、ルイーゼ姫様を勇者様に嫁がせようと思っていたのです。

勇者様はその出自に関係なく国益をもたらす存在なので、勇者様が貴族でもなくてもない一般庶民の出であっても問題ではないのです。

まあ、姫様はエリユーション公国の王族と結ばれることが決定したので、別の方面から国益が生まれたことになりましたがね。

でも、それは置いておくとしても、勇者様とも依然としてつながりが欲しいところなのは変わっていません。そんな勇者様を振ったなんてことになったら……

想像するだけでお先真つ暗です。

かと言って、勇者の妻になる自分を想像しても、お先真つ暗な気分になるのはどうしてでしょうか……というか想像つきません、そんな私。

困りました。最大級に困りました。断れません。

でも勇者様の求婚は受けたくありません。

「アーリア」

私を見つめる瞳の甘さの中に一瞬だけ焔ほのおを宿した勇者様が、いきなり私の名前をその唇に乗せました。

声は大きくはありません。ですが、なぜか広間中にその涼やかな声音が響き渡ったように感じられました。

「改めて言わせて下さい。貴女を愛しています。どうか私の妻になって下さい」

……どうして今になって空気を読むのですか、グリード様……

注目的のなっている中で再度求婚するとは……
あれですね、絶対わざとですね！ 狙って言ってますよね、私が断れないように！

前にも増して汗がダラダラ出てまいりました。

そんな折、縫いとめられたように勇者様から視線を外すことができないうる私の世界の端に、勇者様の仲間達が彼の背後から一生懸命……というより必死の形相で私に向かつて手を合わせて拝んだり目配せしたり、念を飛ばしているのが見えました。あの冷静そうなりユファス様ですら同じようなことをしています。

残念ながら魔力ゼロの私には、彼らが伝えようとしていることを明確に知ることはできません。

ですが、どうしてでしょうか。私にはなぜか「断らないでくれ！ この国が減びてもいいのか！」と懇願こんがんしているように感じられました。

……そうですね。空気は読めるのです、私。
 何だか分かりませんが、滅亡フラグまで立っている模様です。
 困りました。ますます断れないじゃないですか！
 私はグルグル考えました。

その時、ふっと、頭の中で我がミルフォード家の家訓を思い出したのです。
 ……もう、これに従うしかありません。

私はすうっと息を吸って口を開きました。

「勇者様……」

周りの人たちが固唾かたずを呑んで私の返事を待っているのが感じられました。
 ですが、勇者様一行はなぜか女神に祈っているようです。

グリード様……貴方は一体どういう方なのでしょう。私の中で疑惑が芽生えました。
 しかし今はそんなことを考えている場合ではありません。

疑惑は頭の片隅に置いておいて、私は意識を目の前の勇者様に戻して恐る恐る返事を
 口に乘せました。

「……私は勇者様のことをよく知りません。グリード様も私のことをご存じないと思
 います。ですから、返事はお互いのことをよく知ってからということでもいいでしょうか？」

これぞ、ザ・先送り！

我がミルフォード子爵家の家訓の一つ「難しい問題が起きたら先送りにすべし！」です。
 私はややがっかりな空気が蔓延まんえんする広間の中、じっと勇者様の反応を窺うかがいました。

勇者様は感情の読み取れない眼差しで私をじっと見下ろしていましたが——やがて何
 を思ったのか、不意にふわりと笑みを浮かべたのでした。

とたんに私の背後にいる侍女仲間が「キャー！」と黄色い声を上げました。

美形の笑顔はもはや兵器ですね。私も一瞬虚を衝つかれたような気がしましたよ。

そんな喧騒けんそうの中、勇者様は頭を下げて私の手の甲にキスを落としました。

ひい。

またもや背後で黄色い声が上がります。

そうですね、その優雅な所作はまるでどこかの王子様のようですね！

「もちろんです。私も貴女のことを知りたいし、私のことを知ってもらいたいです」

勇者様は言いました。

金色に淡く輝く前髪の間から覗のぞく海色の瞳で、私を射抜きながら——

そんな素晴らしく紳士的な姿を見ながらもゾワツと背中に悪寒おかしなが走ったのは、気のせいだと思いたい私でした。

5 最強の勇者にして最凶の勇者

この世界を創造したのは、光の女神レフェリアと闇の神アーティラードの夫婦神でした。

彼らが新しい世界を創るにあたり最初に生み出したのが、水・土・風・火に光と闇の六種族の精霊王です。

精霊王たちは光の女神と闇の神と共にその力を使って世界を創り上げていきました。

つまり、精霊王は神の眷属けんぞくであり、この世界を構成する存在なのです。

この六種の力は世界の根幹を成す力であり、世界を遍く流あまねれなければなりません。精霊王達六人だけで世界全域に力を循環させるのは難しかったようです。

彼らは自分たちの力の欠片かけらから、眷属を誕生させて世界に配置しました。

それが精霊です。精霊の力が世界を巡って循環がうまくいくようになります。創世の女神と神は世

界に生命を誕生させました。植物、動物など私たちが知っている生き物です。

女神と神、そして彼らの子供である精霊王たちは相談しあって、最後に自分たちの姿に似た生命を世界に誕生させました。それが私たち人間です。

しかし、人間を創造した時に力を使い果たした闇の神アーティラードは、永遠の眠りについてしまいました。

光の女神レフェリアはそれを悲しみました。その嘆きから誕生したのが魔族です。魔族の目が例外なく赤いのは、嘆きの涙から誕生したからだと言なげわられています。

嘆きの存在である魔族は世界の嫌われ者になりました。

そして、世界のすべてに祝福されて誕生した人間を憎み——その時から魔族と人間の対立が始まったのです。

* * *

『こどもに聞かせる世界創造神話』

「前回ここを発つてから一カ月足らずか……」

ふかふかのソファに座りながら女盗賊のミリーは感慨深げにつぶやいた。広間での騒動のあと、別室でシュワルゼ国王たちに歓迎された勇者一行は、しばらくの間ゆつくり休養できる個室と居間を与えられた。現在はそこに六名全員が何とはなしに集っていた。

「まさかこんなに早く魔王を討伐して帰ってこれるとは思わなかったわ」

「そうだね。僕もここを発つ時はそんなこと想像もしてなかったよ。もつとも、あの時はみんな動揺していたから、そこまで頭が回らなかったというのが実情だけど」

そう答えたのは、ミリーの隣に座っている神官のレナスだ。

淡い緑色の髪に黒い瞳を持つ、司祭の中でも「白」という高位の地位にある神官で、一行のムードメーカーでもあった。

「いろんな意味で疲れる一カ月だったよね」

その時のことを思い出しているのか、ため息をつきながらレナスは遠い目をした。

誰もがその感想に共感したらしい。一同の視線は窓側で佇む、疲れを生み出した元凶へと向かった。

だがその元凶である勇者グリードは、そんな視線をまるで意に介さず、ただただ腕を

組んだまま窓の外を眺めている。

その横顔には、何の感情も浮かんでいない。ただ人形のように無機質な横顔がそこにあるだけだ。

広間で見せた甘い微笑みも、愛しそうな表情も今はなく、それらはまるで夢か幻想だったかのよう。

だが、この無表情こそグリードのデフォルトなのだ。

レナスたちに言わせれば、広間でのグリードの方が夢、しかも悪夢のようなものだ。そして彼らはこの一カ月、ずっと悪夢を見せられていたに等しかった。

いや――

「今も悪夢が続いている気がする……」

レナスのつぶやきは全員心のうちを表していた。

悪夢の始まりは一カ月前、シュワルゼ国のこの城に到着した時、グリードがとある侍女に一目惚れしたことだった。

今まで異性への好意どころか他人に興味すら示さなかったグリード。

戦いのパーティである前に友人でもある六人。普通なら、友の身に起こったことを微笑ましく祝福したことだろう。

だが、相手はグリードだ。歴代最強の勇者にして、最凶の勇者である彼が——恋。恐らく、初恋。

彼らはそれを天変地異の前触れだと思った。そしてその予感、ある意味正しかったと言える。

きつと魔族でさえ気付いていないが、世界の命運がたった一人の女性の手に委ねられたのだから。

彼らの脳裏にこの一カ月のことが蘇った。それは戦慄と悪寒と苦悩に彩られた日々だった。

* * *

「少し出掛けてきます」

ルイーゼ姫を救出するべく城を出発し、シュワルゼ国の東にあるミファナと呼ばれる大きな街に来た一行は、高級でもなくみすぼらしいわけでもない中級の宿に部屋をとった。

そこでこれからの方針を話し合ったり、旅の準備をするのかと思いきや、リーダーであるグリードは宿に着くなり一人宿を出ていってしまった。

その無表情で淡々とした口調はいつものことだった。

残されたメンバーは示し合わせたわけではなかったが、宿の食堂の一角に集った。

まだ食事時ではないため、客はほとんどいない。話し合う環境としてはまずまずだ。

だが、誰も重い口を開こうとはしない。

その上、みな一様に戸惑ったような表情だった。

実はここまでの道中も彼らは同じ有様だった。いや、正確に言うと、シュワルゼの王城に着いた時からこの状態だ。

王や重臣たちの前では取り繕っていたが、かなり困惑していた。いや、今にも頭がショートしてしまいそうだったと言っても過言ではない。

彼らは先ほど自分たちの目で見たものが信じられなかったのだ。

実を言うと、今でも信じられない。

グリードが、女性にあんな風に微笑みかけるなんて。あんなやさしい言葉をかけるなんて。しかも抱きしめていた。これに驚かなくて何に驚くというのだ。

普段とまるで違うグリードの態度。あれはもしかして、もしかしくなくても——恋だろうか。

そう思った彼らの頭は混乱でいっぱいになった。

恋！……あのグリードが？

無表情、無感動。まるで人形めいたあの男が、恋？

……彼らの思考はそれ以上考えるのを拒否していた。

それにまだ本人の口から聞いたわけじゃないのだ。何か理由があるのかもしれないし。そう結論づけた彼らだったが、城を出てからここまでの道中、グリードをちらちらと窺^{うかが}うだけで聞きたいのに聞けないという有様だった。

『グリードが恋なんてありえない！』

『でもそのあり得ないことが、本当に起きているとしたら？』

全員、内心で思っているのは同じことだった。

そして一行に奇妙な緊張感を生み出している原因が目の前から消えて、ようやく彼らはそのことについて話をする機会に恵まれたのだった。

「やっぱりあの女性に恋をしたんだろうか……」

難しい顔をして魔法使いのリュファスが重い口を開く。

「信じられないけど、そうとしか思えないわ！ 何あの笑顔！ 終末が来たのかと思っ
たわ！」

と女盗賊のミリーが言えは、鮮やかな黄金の髪と落ち着いた色合いの灰青の瞳を持つ
女戦士のファラが頷く。

「ああ。芝居や演技とは思えなかったしな。信じられんが……本気で恋をしたのかもし
れん」

「……私としては面倒なことに巻き込まれたくないので、気のせいであってほしいので
すが」

重いため息まじりに言ったのはエルフのルファアガだった。

「残念ながら——」

上空に視線を向けていた神官のレナスが言った。

「グリードが彼女のことを好きなのは確かなようだよ。精霊たちがそう言っている」
レナスは精霊の加護を受けた勇者の子孫であるため、精霊の声を聞くことができる。

グリードほどはつきりと姿が見えたり明解な意思疎通ができるわけではないが、彼らの言っていることはわかるし、その気になればこちらから働きかけることもできるのだ。そこでグリードの心の動きに敏感な精霊たちなら分かると思ひ、精霊に問いかけたらしい。

「今も、彼女に贈る腕輪を注文しに行ったらしい。この街には名工がいるんだってさ」
「腕輪……」

彼らの間に衝撃が走った。

「もう贈り物攻勢か!？」とリュファス。

「いや、でも早くないか？ 出会ったばかりだろう？」とファラ。

「しかも、件の女性とはちょっと話をしただけだったわよね？」とミリーが言い、レナスは遠い目をしてアハハと乾いた笑いを浮かべて「どうもそれが対の腕輪らしいんだよねー」と言った。

「対の腕輪!？」

全員がハモっていた。そして直後、いっせいにドン引いた。

出会ったばかりの女性に、対の腕輪——すなわち婚約腕輪を用意する男。

……怖い。恐すぎる。

色々なことをすっ飛ばし過ぎだ！ とくに相手の気持ちをし！

「もうこれで決定ですね……」

疲れた顔をしてルフアーガは断言する。どこか怯えているようにも見える。

ルフアーガはエルフだ。外見は銀色の髪と同色の瞳を持つ美少年だが、ここにいる誰よりも年上で長生きをしている。

勇者一行の導き手であると同時に、監視役という役目を背負っている彼はいつでも冷静だった。——そのはずだった。

いつも超然とした態度を崩さないルフアーガでさえこうなのだ。他の面々は戦慄していた。

でもそれはグリードが恋をしたことではなく、それによって明らかになったグリードの性質の一端に、だ。

何に対しても心を動かされる様子はなかったグリード。何にも執着しない、特別な思いを抱かない男。

それが誰かに特別な思いを抱いたとたん、思いつきり斜めうしろの方向に暴走し出した。

「ねえ、もし彼女が既婚者だったり恋人いたりしたらどうなるのかな……」
レナスが顔を引きつらせながら言った言葉に、全員が一瞬にして青ざめる。

そのいるかどうかも分からない旦那か恋人が、闇にまぎれて消されるであろうことは
確実だったからだ。

腕輪を用意したということは、何が何でも彼女を手に入れるつもりなのだろう。彼女
が不憫ではあるが、グリードを止められる者はここにはいない。

なぜならグリードは歴代最強の勇者と言われる存在だからだ。

最強と同時に、最凶の勇者でもあるけれど。

高い魔力を持ち、女神から勇者としての力を授かった人間。さらに人類史上例のない
全種族の精霊から【精霊の加護】も受けている。

——その気になれば世界をも滅ぼせる。

とくに【精霊の加護】がヤバイ。

精霊は世界に遍く存在する自然そのものの力の具現だ。

水・土・風・火・光・闇を司る彼らは、まれに気に入った人間に加護を与えると
いう。

それが【精霊の加護】。精霊が己の力を使って身を護ったり時には力を貸してその人
間に精霊の力を使わせたりするスキルだ。

だが当代勇者であるグリードに与えられた【精霊の加護】は通常のものとは違う。

いや、グリードの力が【精霊の加護】を進化させたといってもいいだろう。

彼は精霊の力を、精霊の意思に関係なく引き出して自由に使えるのだ。また精霊の方
も忌憚なく彼にその力を委ねている。

精霊は世界を構成する力そのものだ。つまり、その力の使い方によっては世界を滅ぼ
すことも可能なのである。

そんな彼を止める？ 無理無理無理。女神、精霊王クラスでなければ不可能だろう。
彼らにできるのは、被害を最小に抑えるように努力することだけだった。

……なんか、ゴメン。すごくゴメン。

相手の女性（と架空の旦那or恋人）に、彼らは心の中で謝罪した。これからのこと
を想像すると、そうせずにはいられなかった。

あんな勇者でゴメン、と。

だが、ひとしきり謝った一行は、そこでふっとあることに気付いた。
——誰も彼女の容姿を覚えてなかったことに。

「えっと……茶色の髪だったわよね……?」

ミリーが首を傾げながら言う。

「精霊が言うには瞳も濃い茶色をしている、らしいよ」とレナスが何かを確認するように視線を空に動かす。

「グリードが抱きとめた時の身長差から言えば、小柄なようですね」とルファアガ。

「広間にいた時にルイーゼ姫の侍女だと言っていたな」

そのファラの言葉に頷いたのはリュファスだった。

「ああ。姫の第一侍女で、姫が攫われるのを目撃したのも彼女だ。だが……」

言葉を濁すリュファス。彼の「だが……」に続く言葉は口に出さなくても分かった。よく覚えていない、だ。

そうなのだ。グリードの態度にあまりに驚きすぎていたせいか、誰も彼女の容姿を
はつきりと思い出せないのだ。

彼らはバカでも忘れっぽいわけでもない。むしろ記憶力はいい方だ。

なのに、誰ひとり明確にグリードの想い人を思い描くことができないとは……

「と、とにかくすごく普通っぽかった」とレナスが冷汗をかきながら言った。

思い出そうとしても、茶色の髪に小柄な侍女服をまとった女性の、おぼろげな姿しか
思い浮かべられない。

「そうそう。あら、普通の女の子だ、と思ったのよね」とミリー。

「普通で、あまり特徴がなかったような気がする」とリュファス。

「不細工というわけではなく、可もなく不可もない目立たない感じの容姿だったと思
います」とルファアガ。

「あれだな、特徴がなさすぎて覚えてないのだと思うよ。太っていると痩せていると
か、口が大きい、小さいとか何かしら特徴があれば、マイナスイメージであっても記憶
には残っていると思うが、彼女は……」

ファアラが眉を蹙めながら続けた。

「そのどれでもなくて、すべてにおいて平均。だから印象に残らなかったのかもしれない」
ある意味、誰の記憶の端にも残っていないというのは逆にすごいことかもしれない。

だが、それはそれで大問題だ。彼らにとっても重要な人物になるであろう彼女の、顔が思い出せないとは。

——グリードの初恋の相手なのに。

……初恋。

その単語を脳裏に思い浮かべた瞬間、全員が地味に精神的なダメージを受けたのは気のせいだろうか。

「グリード」と「初恋」。なんて似つかわしくない言葉だろう。

勇者の幼馴染でもあるレナスは、失礼にもそう思った。

いや、それより今はグリードの想い人の存在をつきとめなければ。

世界の命運をある意味握っているかもしれないのに。それなのに——

「ヤバイよ。僕、次に会った時、わかるかどうか怪しい」

とレナスが頭を抱えて言うと、リユファスも頷いた。

「下手をすれば、すれ違ってわからないかもしれないな……」

彼女が話した魔王の姿形なんかは覚えているし、その声もちゃんと耳に残っている。

だから声を聞けばわかるかもしれない。だが……

「顔が明確に思い浮かばないのは辛いな。別人と間違えそうだ」

参った、という風にファラが肩をすくめた。

そう。あまりの特徴のなさに、そこら辺にいる街娘が彼女だと言われればそうだと思います。い込んでしまうだろう。

グリードに知られないように接触を図ろうと思っていたのに、これでは叶いそうにないではないか。

——その時だった。

一同のやり取りを眺めていた精霊の一人が、くすくす笑いながらレナスに告げたのは。「あ、風の精霊が教えてくれた。名前はアリアだそうさ。独身で恋人もなしだった。……よかった」

一行は安堵の息をついた。これで罪なき人が闇夜で葬り去られることはなくなったのだ。

あとは、彼女に何が何でもグリードと一緒になってもらうだけだ。人権無視？

いや、それより世界の平和だ。いや、世界の存続だ。

「それにはまず、顔を把握しないと」
リユファスの言葉に全員頷いた。

「いくらなんでもグリード本人は分かるだろうから、次会った時は頭にたたき込もう」
これにも全員が頷いた。

魔族に恐れられている勇者一行とは思えないような会話だが、彼らは本気も本気だった。

ルファアガが眉を擡めて言った。

「それにしても、私たち全員が覚えてないなんて。もしかしたら彼女はその手の特殊スキルを持っているのかもしれないね」

「【隠密】？ いや、もつと別の形で認識できないようにするスキル、か？」
リユファスも難しい顔になる。

彼らはスキルに関して詳しい方だが、それでも全部を知っているわけではない。

中には非常にマイナーだったり、あっても効果の疑わしいスキルがそれこそ山のようにあるからだ。

「とてもスキル持ちには見えなかったが、そうでなければ説明はつかないだろうな。さすがグリードが選んだ人というわけか……」

ファラが納得したように頷く。

「顔で選ばないところがグリードらしいわね」とミリー。

「そうだな。普通に見えて、普通じゃない侍女さんか……」

さつきから可笑しそうに精霊たちがぐすくす笑っているのを怪訝に思いながら、レナスも頷いて言った。

——顔を見たけどよく覚えていない。

実はそれはモブの特徴に他ならないのだが、準主役に相当する役割を担う彼らはそれを知らなかった。

先日泊まった宿屋の主人を覚えているか？

食料を買った店の主人の顔を思い出せるか？

食堂で給仕してくれた女性の顔は？

答えは——NOだ。

彼らの顔を一度は見たはずなのに、記憶に残っていない。なぜならそれは彼らがモブだからだ。

モブについて深く考えることなどこれまでなかった彼らは、「顔を見たはずなのに思い出せない」なんて人間がいることにさえ、今まで気付いていなかった。

* * *

時はふたたび衝撃の勇者求婚後。

城の居間に集まった彼ら一行は、ふわりと部屋の空気が動くのを感じた——精霊だ。

「ああ、どうやら新聞記者たちにあの侍女さんの存在を嗅ぎつけられたようですね」

その「声」は同時にグリードにもレナスにも届いたが、精霊の言葉を口にしたのはエルフのルフアーガだった。

精霊王と人間の間に生まれた子供を祖先に持つエルフにも、精霊の声が聞こえるのだ。

神官のレナスも頷いて、他のメンバーに分かりやすく説明した。

「今、風の精霊が教えてくれた。勇者がアリアに求婚したことを、城の下働きから新聞記者たちが聞き出したらしい。記事になるのも時間の問題だね」

「下働きか……そんな所にまでも噂が広まってるのか」
眉を顰めたのは魔法使いのリュファスだった。

自身も王族である彼は、城の広間に集っていた人間が、ある程度の地位にある人たちのみであったと知っている。

小さい城とはいえ、働いている人間の数は膨大だ。末端の人間は広間に入ることはできない。

なのに下働きにまですでに話がいつているとなると、恐るべきスピードで噂は伝播していくことになるだろう。

「思った以上に早く彼女の存在は知れ渡ってしまうな……。相変わらず鬱陶しい連中だ」
ため息混じりに言ったのは女戦士のファラだった。

そんなファラに、女盗賊のミリーが苦笑しながら言った。

「仕方ないわよ。それが連中の仕事なもの。彼らも必死なんですよ。何しろあたしたちから魔王討伐についての詳細な情報が得られないんだからさ」